



自然で柔らか 空間の不思議



アフリカの壺

つほ

早川 俊一

1

7年 油彩 46×55

空ある。
空間のなかに、と
とりあえず許すてゐる。
どうも感じが出る。
これは「雲が黒かたは藍」
だらうか。
そつといふ意味での「物」とは、
は、たゞ随分違うものように
みえる。
さういふと、空気が立つて
手に触るほど、空気が立つて
眼が潤してゐる。
そのなかに影のよに雲は
あらわれる。むしろ、空気の
粒子がさう遠くからに
凝集して周囲と連続してい
るのを感じた。
つまり、雲と空間はほとんど
同質のものに見える。



1950年長野県生まれ。74年渡仏。彫刻家マルセル・ジリに師事。81年まで国立美術学校に在学。日本ではアスクエア神田ギャラリー（神田錦町1の8）での個展を中心に活動。パリ在住。

東京神田の幽庵で先月間かいた早川龍二に、そんな作品が何点か並んだ。さほど幽くはないが清涼な印象の幽庵の壁面で、絵は幽庵の空気にそそかに通じ、いながら静かに燃焼していた。

様式を主張するもので、描かれるものを強調するのではなく、もっと自然に、さらかな

吸引に多分なされてゐた。作者がみちをさしたうにじつと空間を凝望する。彼の視線は帝と周囲の空間に等分になつてゐる。空間があり、そこにもものがある。このことは忠實だ。その不思議のなかに人は生かされ、ものとかかわりながら空間を呼吸してゐる。そんな不思議にかつて彼は描く、無としての空間では無い、ものを存在せし、人を生かし、すべてを感え立たせる実体としての空間を、手に触れるもののように描いてゐるのだ。

「夢中で風景を描いてゐた

[illegible][illegible]

「絵は風景」 自然で柔らか 空間の不思議

「アフリカの壺」 早川俊二

壺がある、
空間のなかに、と
とりあえず言ってみる。
どうも感じが出ない。
これは「壺が描かれた絵」だろうか。
そういう意味での静物画とは、だが随分違うもののようにみえる。
さわさわと、空気の粒子が手に触れんばかりに粒立って視界を浸している。
そのなかに影のように壺はあらわれる。むしろ、空気の粒子がそこだけ壺のか
たちに凝集して周囲と連続しているという感覚だ。
つまり壺と空間はほとんど同質のものに見える。
粒立つ空気の摩擦によるものか、画面は内側からほのかな熱と光を発して適度
な温かみをたたえている。
そのまま包みこまれてしまいそうな、快適な深みをもつ空間が生まれている。
こんな絵に接するのは初めてという気がする。

東京神田の画廊で先月開かれた早川俊二展に、そんな作品が何点か並んだ。
さほど広くはないが清潔な印象の画廊の壁面で、絵は周囲の空気とひそかに通
じあいながら静かに燃焼していた。

様式を主張するのでも、描かれるものを強調するのでもない、もっと自然で
柔らかな吸引力にみちた画面だ。

作者が多分そうしたようにじっと空間を凝視する。彼の視線は壺と周囲の空
間に等分に注がれている。

空間があり、そこにものがあるというのは不思議だ。その不思議のなかに人
は生かされ、ものとかかわりながら空間を呼吸している。

そんな不思議に向かって彼は描く。無としての空間ではない、ものを存在さ
せ、人を生かし、すべてを燃えたたせる実体としての空間を、手に触れるもの
のように描いているのだ。

「夢中で風景を描いていた高校生のころ、一つの空間体験がありました。通
学途中の切り通しで、向こうに見える村と今ここにいる自分との位置関係が、
ある時わかった。視線が向こうまで行ってまた帰ってくる、その間の距離がは
っきりつかめて自分の位置が見えたんです。生きていることを実感したともい

える。そういう生きた空間を描きたい。絵は描写することではない、単なる様式やモチーフでもないわけです、僕には。アメリカ流の現代の美術では空間なんてものに興味を持つ人はいません。面白いものはあるけれど長続きしない。現代はすごいスピードで空間が飛び去る時代ですが、人は歩く速度でしか思考できないんです。人の目でとらえられる速度というものがある。そこに立った行き方しか、なかったということですね僕には」

切り通しの体験で、高校生は存在の不思議、空間という不思議に目ざめた。それを観念ではなく実在として描こうとしてきたのが、早川俊二の軌跡だったともいえる。

その作業にすべての意識を集中させる。最小限の筆で最大限の表現をめざす。無駄をそぎ、生活を簡素化し、少しずつ求める空間の充実をはかってきた。

パリに渡り、西欧美術の深さと厚みに打ちのめされて再出発を決意したのは二十四歳の時だった。そのままパリに住みつき、二十代はデッサンに、三十代は絵の具の製作研究に費やした。ようやく自分なりの油彩が生まれ始めるのは四十代以降である。

このおそるべき自分流の速度、その自意識と距離感に、現代の自立した精神のかたちを見る思いがするのだ。

芥川 喜好 記

早川俊二

1950年長野県生まれ。74年渡仏。彫刻家マルセル・ジリに師事。

81年まで国立美術学校に在学。日本ではアスクエア神田ギャラリー(神田錦町1の8)での個展を中心に活動。パリ在住。

読売新聞 日曜版 1997年(平成9年)12月7日掲載